論文 2

タイにおける政治的つながりの回路
――2019年総選挙前後の変遷とタイ貢献党の政治的集まりを中心に

高城　玲

はじめに

2014年5月20日、当時の陸軍司令官だったプラユット・チャンオーチャ[1]が、タイ全土に戒厳令を発した[2]。名目は、国内の混乱を収拾し秩序を維持することだった。当時は、タクシン・チナワット元首相[3]を軸とするタクシン派の反独裁民主戦線（ノー・ポー・チョー：UDD）に対して、反タクシン派の民主主義市民連合（パンタミット：PAD）、さらに2013年末から反タクシン派を引き継いだPDRC[4]という国家を分断する形での混迷が出口を見いだせない状況だった[5]。この対立が国家を揺るがしかねないとして軍が介入に乗り出したのである。2日後の5月22日には、当事者間の話し合いが不調だったことを理由にクーデターが宣言され、プラユットを議長とする国家平和秩序維持評議会（コー・ソー・チョー：NCPO）が国政を担うと発表された。その後、2019年3月24日に総選挙が実施されるまでの5年近くにわたって、軍主導の暫定政府がタイの政治運営を担うこととなる。

こうして2014年のクーデターから2019年の総選挙直前まで、秩序を維持することを名目に大がかりな言論統制がしかれた。特にクーデター直後は、政治家や運動家のみならず、言論家、大学教員、知識人にも軍施設への出頭命令を出し、政治活動に関わらないとする念書に署名をさせた。マスメディアに対してはもちろん、地方末端のコミュニティラジオに対しても、軍が発表する内容のみを報道させ、軍が張り付いて定期的な監視・検閲を続けた。インターネットのウェブサイトも統制の対象となり、タイで利用者が急増していたスマートフォンを介したFacebook、LINEといったソーシャルネットワーク[6]に対しても厳しい監視の目が及ぶこととなった。加えて、NCPOが出した布告により、「5人以上の政治集会の禁止」や「社会対立や分断を煽る行為の禁止」が定められた。こうした統制は、暫定憲法44条でプラユットに与えられた超法規的な権限によって[7]、逮捕拘束を伴うものとして圧倒的な言論抑圧となった。この時期の言論抑圧は、政治的つながりの回路という点から考えれば、軍主導政府側に反対する勢力と国民とのつながりの回路が強制的にシャットダウンさせられていた状況と言えるだろう。その一方で、国民へのつながりの回路を独占的に確保していたのは、軍主導政府側であった。

1　1954年生まれで、陸軍司令官に就任。2014年のクーデター後は軍主導政権の暫定首相となり、2019年の総選挙後も継続して首相となっている。

2　Bangkok Post 21 May 2014などを参照。

3　1949年チェンマイ県生まれ。警察官僚を経て、通信業界で財閥を築いた後、政界に進出する。2001年から06年まで首相を務めたが、06年クーデターで追われ、海外生活を余儀なくされている。06年のクーデター以降は、タクシンを対立軸とする政治社会的な混乱が引き起こされている。

4　「国王を元首とする完全な民主主義改革のための国民委員会（コー・ポー・ポー・ソー：PDRC）」は、2013年以降ステープ元副首相が中心となって反タクシン派の運動を引き継いだ団体である。

5　現代タイにおけるタクシンを軸とする政治的対立については、浅見（2010）、重冨（2010、2018、2020）、柴田（2010）、高城（2015）、高橋（2015）、玉田（2013）、村嶋（2010）、山本（2016）、Nelson（2010）、Pavin（2014）などを参照。

6　タイの学生の政治行動と意識をアンケート調査から分析したシリヌット（2016）は、政治とメディアの関係に関して、タイの学生が政治に関する情報を得るのはインターネットが最も多く、次にテレビ、新聞と続くことを示している。中でも最も利用されるのはFacebookとしている（シリヌット 2016、200-204）。タイにおけるインターネットの利用状況に関しては、Krasuang Diciton Phu'a Sethakit lae Sangkhom（デジタル経済社会省）（2019）も参照。

7　2014年暫定憲法44条では、NCPOの長が必要と判断すれば、あらゆる制圧や行為をなすことが可能とされ、かつ絶対的、究極的なものとされた。

写真 1：道路脇に並ぶ候補者の選挙立て看板
出所：筆者撮影

写真 2：歩行者天国での選挙運動
出所：筆者撮影

こうした言論統制がある程度緩和されたのは、総選挙が行われる直前の 2018 年 12 月になってからである。総選挙実施の 2019 年 3 月に向けて、5 人以上の政治集会や政党の活動などが認められた。それまで 4 年半もの間、自由な言論活動が完全に封じられていた時期を経て、直前に迫った選挙に向けた政治活動が限定付きながら解禁されたのである。新たに多くの政党も結成され、それらを中心とする選挙運動や政治活動が一気に活発化した（写真 1、2）。

2019 年 3 月 24 日の投票を経て選挙結果が確定されたのは、得票数と議席配分数に修正が加えられたことなどにより、投票 1 ヶ月半後の 5 月になってからである。下院議席数 500 の中で上位から 5 党を挙げると、タクシン派のタイ貢献党（*phak phu'a thai*）が 136 議席、プラユットの支持母体である国民国家の力党（*phak phalang pracharat*）が 116 議席、反軍派で新興の新未来党（*phak anakhot mai*）が 81 議席、民主党（*phak prachathipat*）が 53 議席、タイ誇り党（*phak phumcai thai*）が 51 議席となる[8]。このうち、6 月に行われた最終的な首相指名で、プラユットを推す国民国家の力党に加えて、民主党、タイ誇り党なども連立を組んで与党となっていくが、タイ貢献党と新未来党など 7 つの政党が野党として反軍派を結成し、選挙で選ばれた下院に限定すれば親軍派と反軍派の数は伯仲していた。結果、プラユットが首相指名を受けたことで、軍側が信任を受けたことが強調される側面もあるが、約 5 年にわたる軍主導政権下で行われた自らを利するような選挙制度改革やつぎ込まれた予算などを考慮すれば、それでもプラユットの支持母体である国民国家の力党が獲得できたのは 500 議席中 116 議席にとどまっていたという側面も看過することはできない。

むしろここで注目したいのは、長年の軍主導政府による言論統制でその活動が封じられていたタイ貢献党と、新たに結成されたばかりの新未来党である。タイ貢献党に関しては、軍主導政権がクーデターからその後の政治運営を通じてタクシン派の政党として一貫して標的とし、その勢力を削ぐことを主眼

8　Samnakngan khanakamakan kan lu'aktang（タイ選挙管理委員会事務所）発表の 2019 年 5 月 28 日集計結果による。

写真 3：「タイ貢献党の議会の星と握手する」会の案内
出所：Phak Phu'a Thai（タイ貢献党） Facebook

写真 4：新未来党による「模擬議会」の案内
出所：New Gen Network Bangkok Facebook

としてきた対象であった。前回タクシンの妹インラック[9]を擁立して過半数を制した 2011 年総選挙での獲得議席数からは大分数を減らしてはいるものの、いまだ下院での第 1 党の座を保持し続けたのである。新未来党に関しては、選挙の約 1 年前に結党されたばかりで今回が初の選挙にも関わらず、大企業の御曹司である党首タナトーン・ジュンルンルアンキット[10]と憲法学者の幹事長ピアブット・セーンカノッククン[11]という若い幹部を中心に、集会やインターネット、ソーシャルネットワークを利用した選挙戦を展開し、誰もが予想しなかった 81 議席を獲得、大躍進を遂げた。

では、これらふたつの政党は、いかにして国民とのつながりを獲得して来たのか、また選挙後も含めていかにつながりの回路を獲得しようとしているのだろうか。本稿ではその一端を、紙幅の関係からタイ貢献党をめぐる動きに焦点を当て、2019 年総選挙前後の変遷を中心に検討する。特に、総選挙後の 2019 年 8 月に開催された「タイ貢献党の議会の星と握手する（*cap mu' dao sapha phu'a thai*）」会という政治的集まりにも注目して考えてみたい（写真 3）。実は、新未来党も同じ時期に若者を中心とする国民を対象に「模擬議会（*sapha camlong*）」という小さな政治的集まりを開催しており（写真 4）[12]、両者の比較も興味深い論点ではあるが、新未来党の動きに関しては、稿を改めて検討することとしたい。

いずれにせよ本来、国民とのつながりを獲得しようとする動きは、選挙期間中が最も活発となる時期であろう。ここで、選挙運動期間中のみならず、選挙後にも焦点を当てる意味として、以下の 2 点が挙げられるだろう。第 1 は、今回の選挙では選挙運動に入る前が、言論統制の時期でもあったため、選挙期間を経て、その前後でどのような変遷があったのかを検討するためである。特に、選挙運動中には他党の動向もにらみながら、選挙後の連立可能性を考慮して戦略も容易に変化しがちだが、新政権が確定

9　2011 年の総選挙でタイ初の女性首相に選出され、2014 年 5 月まで首相を務めた。2014 年クーデター後も軍主導政府側から司法を通じて一方的に訴えられ、判決が出される直前の 2017 年 8 月に国外に退出した。
10　1977 年生まれで、タイ有数の自動車部品財閥タイ・サミットグループの御曹司でもあるが、2018 年に新未来党を結成し党首となった。新未来党のホームページと Facebook に掲載の略歴参照。
11　1980 年生まれで、タマサート大学で教鞭をとっていた著名な憲法学者。新未来党結成時に幹事長となり、タナトーンと並んで党の二枚看板となった。新未来党のホームページと Facebook に掲載の略歴参照。
12　新未来党関連の特に New Gen Network という学生等を中心とする組織が主催していた。

した後であれば、いかにして国民とのつながりを得ようとするのか、より長期的な腰を据えた姿勢とそのつながりの実態が、選挙前後の変遷と合わせて見えやすいためである。第2は、プラユットが首相に選出された選挙後に新たに展開した政治社会的状況の一端も合わせて検討するためである。

以下では、まず2019年総選挙前後における概況と主に軍主導政府側の動きを整理した後、反軍派の政党の中で、タイ貢献党の対応に焦点を当てる。中でも、選挙後にタイ貢献党が開催し始めた「タイ貢献党の議会の星と握手する」会という政治的集まりでの相互行為に着目する。これらを通して、政治的つながりの回路に関する総選挙前後における変遷と、選挙後に展開されていく新しい回路の可能性を考える手がかりとしたい。

1. 2019年総選挙前後の概況と軍主導政府側の動き

1-1 2019年総選挙の概況

まずは、軍主導政府のNCPOが総選挙に向けて新たに策定した選挙制度と首相指名方法を簡単に整理しておきたい。NCPOは2014年クーデター直後に民政復帰へのロードマップを示していたが、その行程は遅れに遅れ、上院下院議員選出法が官報で公布されたのは結局2018年9月となった[13]。

上院は本来定数200で任期5年であるが、当初の5年間は定数を250とし、NCPOが主となる上院議員選出委員会が選出するため、その意向を受けた者が任命される。下院は小選挙区比例代表併用制による選挙で選出され、定数500が小選挙区350と比例区150に分けられ、任期は4年である。選挙で有権者が投票するのは小選挙区における候補者名の1票のみである。比例区に関しては、政党が小選挙区で獲得した候補者の票を政党ごとに全国で合算した割合に応じて議席が配分される。但し、政党が小選挙区で得た得票数から算出された割合を超えて比例区の議席を得ることができないと規定された。従って、小選挙区で獲得した議席が多い政党ほど、比例区では議席を獲得できず、逆に小選挙区で破れ、2番手や3番手につけた政党ほど比例区での議席が多く得られることとなる。結果、この制度は特定の政党が大勝することを難しくする。実際、今回の選挙で下院第1党となったタイ貢献党は、比例区で1議席も獲得できていない。この制度は、タクシン派タイ貢献党の選挙での優勢を軍主導政府側が覆すために考え出された制度とも指摘され、実際にこの制度を前回2011年の選挙得票数に適用した場合、結果として大勝だったタクシン派政党の議席数が減少することが試算されている[14]。

首相の選出方法は、2017年の軍主導政権下で制定された憲法において、本来であれば下院の過半数で選ばれるとしながら、5年間に限っては上下両院の投票で決定されるという条件付きとなっている。つまり、今回はNCPOの意を受けて選出・任命された上院250と選挙による下院500の計750名の過半数で選出されるという制度が適用された。これは、下院の選挙によって選ばれた政党の影響を極力抑え、NCPOの影響力を維持するための制度設計と言えるだろう。

2019年3月24日に実施された総選挙の結果は、先に述べたとおり、軍主導政府側に有利な制度でありながら、プラユットの支持母体である国民国家の力党は下院で116議席にとどまり、第1党は136議席を獲得したタクシン派のタイ貢献党であった。軍側は、首相選出には上院250を上乗せできるものの、下院の議会運営も考えて連立の道を選択せざるを得ず、結果、民主党とタイ誇り党、タイ国民発展党などにも閣僚ポストを配分し、少数政党も糾合して計19の政党により下院で何とか過半数を超える連立与党とした。他方、下院第1党を維持したタイ貢献党と新しく躍進した新未来党を中心に、自由合同党など7つの政党で「民主主義派政党（*phak fai prachathipatai*）」連合を結成し、下院で過半数に迫る数を確保している。これら7つの政党は後に「国民のための野党（*faikan phu'a prachachon*）」と称し、反軍派の結束を強めようとしている。

結局、連立与党の確定にも時間がかかり、プラユットが首相に選出されたのは6月に入ってからとなった。上院を含めたプラユットの得票数が500票、反軍派野党連合の統一候補である新未来党のタナト

13 青木・今泉（2019、283）、今泉（2019、3-5）、iLaw（2019）などを参照。
14 真辺（2019、2）を参照。

ーンは 244 票だった。上院の数を除けば、下院ではわずかな差であった。以下では、まず選挙へと向かう過程の中で軍主導政府側が講じてきた動きに関して、社会的な背景とあわせて、プラチャーラット政策と反軍派への圧迫という 2 点に着目して整理してみたい。

1-2　軍主導政府によるプラチャーラット政策

軍主導政府は 2016 年からプラチャーラット（*pracharat*）と称する官民協力の経済支援政策を大々的に推進してきた[15]。プラチャーラットとはタイ語で国民と国家をかけあわせた言葉で、政策としては官民協力と訳されるが、この言葉がそのままタイ語で軍側の政党名として使われており、政党名としては国民国家と訳されている。つまり、プラチャーラットという軍主導政府が政府予算で推進してきた政策名がそのまま軍側の政党名となっているのである。プラチャーラット政策の中心は 2017 年から低所得者向けに支給された福祉カード（*bat sawadikan haeng rat*）であると言えるだろう。この政策では年間所得が低い対象者（3 万バーツ未満の最貧困層と 3 万バーツから 10 万バーツ未満の貧困層[16]）に段階を付けながら生活費支援（月 200 から 300 バーツが基本）や公共交通運賃支援、ガス代支援などの名目で毎月カードにチャージされる。この政策は、貧困者カード（*bat khoncon*）とも揶揄されたが、2018 年末には国民の約 2 割がカードを取得するまでとなった。さらに、選挙直前の 2018 年 12 月には、カード所有者全員に一律 500 バーツの一時金を支給し、現金で引き出し可能とした。これに関しては、選挙における 1 票の買収額を想起させる金額だったこともあり、選挙目当てのばらまき政策とも批判された[17]。この他にも、住宅取得支援、米・天然ゴム農家への支援、公務員年金増額など、軍政府側が発表したプラチャーラット（官民協力）関連の政策も多岐にわたり数多い。

しかも軍主導政府はこれらの支援政策を発表しながら、毎週火曜日にバンコクの首相府で行われる閣議を 2018 年にはほぼ月 1 回の割合で地方を会場として開催したことも、政治的つながりの回路という社会的な影響としては見逃せない[18]。プラユットなど軍主導政府の閣僚が地方で閣議を開催すると同時に、地方住民に対して直接自らの経済支援政策をアピールする機会ともなった。その後、閣僚等は選挙戦で国民国家の力党の主要候補者ともなっていったのである。

1-3　反軍派への圧迫

次に、選挙前後において、軍主導政府側が講じたもうひとつの大きな動きとして、反軍派の政党や個人に対する圧迫の問題を取りあげたい。時期は少しさかのぼるが、まず、2014 年クーデター時当初から軍側に標的とされたのは、タクシン派の首相だったインラックだった。もともとクーデターの引き金の一端も、2014 年 5 月に憲法裁判所が、インラック政権下で行われた国家安全保障会議事務局長人事が、首相の職権を乱用した不当な人事介入にあたるとし、違憲とする判決を下したことにあった[19]。これによって、インラック首相は即時に失職する事態となり、同月の軍による戒厳令とクーデターが引き起こされたのである。その後、インラックへの司法を介した圧力は、インラック政権が推進した農民支援の米担保融資制度[20] に向けられる。軍主導政府による議会は、この制度が国家に与えた損害は莫大で、それを容認していたインラック前首相は職務怠慢だとして弾劾を決議し、5 年間の公民権停止の上、裁判にかけることとしたのである。これに対し、インラックは 2017 年 8 月の軍主導政権下での判決を避けて、国外に退出するという選択をし、その後は本人不在のまま最高裁から実刑判決が出された。こうして司

15　プラチャーラット政策や福祉カードについては、青木・今泉（2019、287-288）、江川（2019a, b）、玉田（2019、8-11）などを参照。
16　1 バーツは約 3.5 円前後である。
17　玉田（2019、8-9）などを参照。
18　玉田（2019、11）などを参照。
19　Bangkok Post 8 May 2014 などを参照。
20　他に担保がない地方農村部の農家のために、収穫した籾米を担保に資金を融資する制度であり、インラックが導入したことで、2011-2012 年の農家所得が上昇することとなったが、後に財政的な綻びを見せ始めて批判の的となっていった。江川（2014）なども参照。

法を介した圧迫によって、反軍派の中心人物のひとりだったインラックは選挙戦を前に国外へ去るという状況に追い込まれたのである。

その後、選挙戦に入ってからも、反軍派の政党や個人に対する圧迫は続いた。選挙直前に注目を集めたのは、タクシン派政党のひとつであるタイ国家維持党（*phak thai raksa chat*）が国王の姉を首相候補に担ぎ上げようとしたことに対する対応だった。国王による「不適切」との発言を受けて、即座に憲法裁判所に提訴され、タイ国家維持党には解党が命じられることとなった。この時は国王自身による発言を受けてのことではあったが、以前から軍主導政権下で繰り返されてきた司法が政治に介入するという政治の司法化の問題でもある[21]。当初からこうしたリスクを回避するために事前に分党化の戦術をとっていたタクシン派であったが、結果として選挙前にそのひとつが解党に追い込まれ大きな打撃を受けることとなった。

反軍派の政党や個人に対する司法を介した圧迫は、選挙後にも続けられた。その次なるターゲットは予想をこえる躍進を遂げた新未来党の党首タナトーンであった。まず選挙後、首相選出前の 2019 年 5 月、選挙管理委員会はタナトーンがメディア会社の株式を保有したままで立候補したため、立候補資格に反しているとして、憲法裁判所に訴えた。タナトーンは立候補届出の前に母親に譲渡済みであると反論したが、この訴えを受けて、議員資格一時停止が即座に決定された。その後、11 月には憲法裁判所が議員資格剝奪の判決を下したのみならず、直後の 12 月にはタナトーンから同党への資金融資が違法だとして、81 議席を獲得した政党の新未来党に対しても、選挙管理委員会から解党請求が申し立てられ、2020 年 2 月には憲法裁判所から解党が命じられるまでに至っている。

プラユット政権に対峙する反軍派勢力の中でも、特に国民から支持を得ているとみられる政党や人物が、ピンポイントで司法を介した圧迫を受けている状況が見て取れるだろう。政治的つながりという側面から考えれば、これらの圧迫は、結果として対象となる人物や政党の政治的生命までもが絶たれかねないという点において、国民とのつながりの回路を一方的かつ強制的に遮断するということを意味すると言えるだろう。

以下では、こうした軍主導政府による政策や圧迫のなかで、反軍派側が総選挙前後において国民との政治的つながりを獲得するためにどのような対応をしてきたのか、特にタイ貢献党の動きに焦点を当て、選挙後に開催された政治的集まりにも着目しながら検討してみたい。

2. 選挙運動期間中までのタイ貢献党による政治的つながりの回路

2-1 選挙運動開始前

タイ貢献党が国民とのつながりを確保する手法は、集会のみならずインターネット、ソーシャルネットワーク、コミュニティラジオなどを通じたメディアなど、言論統制を経ながらも、タクシン時代から多岐にわたって活発に展開されてきた。例えばクーデター前の 2009 年 3 月頃、タクシン派の赤シャツ UDD による当時の民主党政権に対する抗議集会では、タクシン自身が海外から携帯電話やインターネットを介して（フォーン・インやビデオ・リンク）、集会に集まった人々に直接語りかけるということが行われていた[22]。その様子が自派の衛星テレビチャンネルやラジオを通じて全国に生中継されるなど、まさに携帯電話や衛星通信事業を起こしたタクシンの面目躍如と言える手法であった。

タクシン派は、最初に政権についた 2000 年代初頭より、インターネットやソーシャルネットワークから地方末端のコミュニティラジオまでを活用して、国民とのつながりの回路を多様なメディアを介して確保しようとしてきた。この手法は当時まさに画期的であった。それ以前は、特に農村部での選挙運動といえば、個別の選挙運動員のネットワークによる戸別訪問、違法ではありながら有権者を招く饗応、

21 玉田（2017）、外山（2018、75-79）などを参照。
22 村嶋（2009）、Nostitz（2014）、UDD 集会でのタクシンのビデオ・リンク演説（28,30 Mar. 2009）などを参照。
23 高城（2014、227-294）では、地方選挙の運動過程を戸別訪問、饗応、買収の 3 つの側面から論じた。選挙運動に関しては Bowie（2008）、Walker（2008）も参照。

写真 5：ピックアップトラックを利用した選挙カー
出所：筆者撮影

写真 6：タイ貢献党の選挙立て看板
出所：筆者撮影

さらに買収など、主に各地の選挙運動員を介して政治的なつながりを獲得する手法が多く見られた[23]。タクシン派による手法を契機として、特にそれ以降は、従来型の手法に加えて、多様な新しいメディアを介した回路も必要不可欠なものとして、あらゆる政党でも認識されていったと言えるだろう。

だからこそ、2014 年に NCPO がクーデターを宣言した際に、そのメディアを介したタクシン派の回路を徹底的に統制、遮断しようとしたのである。クーデターから 2018 年 12 月に選挙運動が解禁されるまでの間、タイ貢献党にとっては他の政党以上に活動の両翼を封じられた状況となった。あらゆるメディアが軍 NCPO の検閲を受ける中で、この間タイ貢献党や赤シャツ UDD 側がかろうじて国民との回路をつなぎとめる機会となったのは、各地で行われる宗教儀礼を活用することだった。例えば、タクシン派の牙城でもあるチェンマイで、UDD 赤シャツのコミュニティラジオ局が主催した仏教儀礼の事例が一例として挙げられる[24]。仏教的な儀礼である入安居を祝うことを理由として、かつてのラジオ局のメンバーやタイ貢献党関係者を集め、市内の寺を訪問し各寺で僧侶に寄進を行ったのである。あくまで入安居の寄進という宗教的な目的を前面に出していたため、軍によってそれを阻止されることはなかった。参加したかつてのラジオ局顧問によれば、ラジオ局の政治的活動を封じられている中で、あらゆる宗教的な儀礼を利用してメンバーのつながりを保つ機会としたかったと言う[25]。統制下での限られた回路ではあるが、可能性のある機会をとらえて国民とのつながり、あるいはメンバー間のつながりを何とか維持しようとした事例と言えるだろう。

それでは、こうした言論統制の時期を経て、2019 年総選挙の前後でタクシン派タイ貢献党は国民との政治的つながりの回路をどのように獲得しようとしていったのだろうか。

2-2　選挙運動期間中

ここでは運動期間中に関して簡単に整理してみたい。選挙違反に問われかねないという状況の中で、従来通りの候補者・政党の立て看板やチラシ、選挙カーは全国の各選挙区で多く見られた（写真 5）。特に、今回の選挙では軍主導政府側が敵対する反軍派の運動に関して、選挙管理委員会による選挙違反の監視の目がこれまでになく厳しくなっていたという[26]。そのため、立て看板やチラシ、選挙カーという通常の運動の比重が相対的に重くなっていたと言えるだろう。選挙期間中には立て看板が全国各地に立ち並ぶが、特にタイ貢献党の立て看板が特徴的だったのは、候補者の写真に加えて、政党の政策やメッセージを記した文字だけの看板が多く活用されていたことである（写真 6）。他党は従来通り、候補

24　高城（2018、142-143）を参照。
25　チェンマイ市内コミュニティラジオ局での聞き取りによる（2014 年 9 月 5 日）。
26　特に饗応や買収は少なくても確認されなかった。チェンマイ県のタイ貢献党選挙運動員への聞き取りによる（2019 年 3 月 11 日）。

者の写真や文字と組み合わせたものが多く見られた中で、文字だけの看板は逆に目を引いた。言論統制下で長らく自らの主張を封じ込められてきた反動もあるだろうが、言葉を介して、特に韻を踏んだキャッチフレーズ的な言葉を積極的に活かして国民とのつながりを獲得しようとしたことがうかがえる[27]。

次に、運動期間中に見られた動きとして、クーデター前からタクシン派が培ってきたインターネット、ソーシャルメディアを含めたメディアの活用について見てみたい。特に今回の選挙運動期間中は、政党や候補者による不用意なメディアの活用は選挙違反とされかねないため、基本的には自制的なものとなっていた。かつてと比べると、タクシン自身が海外から衛星回線を通じて集会に語りかけ、それが自派のメディアを通じて中継されるというようなことは、今回一切行われていない。軍主導政府によって容疑をかけられ政党党員ともなっていない国外居住のタクシンが、タイ貢献党を「支配」していることは憲法違反だとして、選挙管理委員会が調査委員会を設置し、タクシンがメディアを介して選挙戦に影響を及ぼすことを牽制・排除しているためでもある。他にも政党や候補者による選挙戦でのメディアの利用は、監視の対象として制限されていた。

しかしながら他方で、インターネット上やソーシャルメディア上には匿名が担保される媒体を含めて、一般の個人を発信者として選挙に関連する多種多様な情報が飛びかった。中には情報の真偽が危ぶまれる噂レベルのものも多く含まれるが、注目を集めるものも少なくない。例えば、選挙戦中に政党や候補者が主催する選挙運動や正式の集会などに関して、参加した一般の個人がスマートフォンなどの動画や静止画で撮影し、それを YouTube やソーシャルネットワークの Facebook、LINE などで投稿・拡散する事例である。このことによって、マスメディアによる報道とは別の視点も含めて、各自がそれぞれのスマートフォンでいつでも検索・閲覧可能な形の映像による情報となり、しかもそれが限りなく複製され拡散されていく状況となっていた。政党側が直接発信したものではなく、一般の個人によるものではあるが、結果として政党側と国民とをつなぐ政治的な回路として、監視が厳しい選挙運動期間中も重要な意味を持っていたと言えるだろう。

3　選挙後に開催されたタイ貢献党の政治的集まり

ここでは、選挙後においてどのような動きがあったのか、タイ貢献党を中心に検討する。特に、党によって開催された政治的集まりに着目し、そこで繰りひろげられる相互行為のやりとりも分析対象とすることで、政治的つながりの回路を構築しようとするミクロな過程を照射してみたい。

3-1 「議会の星と握手する」会

タイ貢献党は、2019 年総選挙で 136 議席を獲得して下院第 1 党を維持したが、小選挙区での勝利が多かったため、軍主導政府が制定した選挙制度によって、比例区では 1 名も当選者を出すことができなかった。結果、首相候補となっていた比例区のスダラット・ケーユラパン[28] も下院議員に選出されなかった。最終的に反軍派の 7 つの政党側が 6 月の首相指名選挙で候補者としたのは、新未来党のタナトーンであり、タイ貢献党の執行部も選挙後に一部交代することとなった。

こうしてクーデターから約 5 年を経て国会が開催され、タイ貢献党自身も新たな体制で再出発する中で、国民とのつながりを得ようと新たなひとつの試みが企画された。「タイ貢献党の議会の星と握手する」会と銘打たれた政治的な集まりである。クーデター前はこのような機会が数多く存在していたが、5 人以上の政治的集会が禁止されていた言論統制後の選挙を経て、下院議員と国民をつなぐひとつの回路として、党が主催した新たな企画である。ここでは、その第 1 回目としてバンコクの党本部で開催された

27　タイ貢献党のある候補者によれば、覚えやすいキャッチフレーズは選挙カーの声による放送でも有効的に使えるという（2019 年 2 月 21 日のチェンマイ県郡部での聞き取りによる）。

28　1961 年生まれで、1990 年代初めから政治家となり、90 年代の民主党政権時代から副大臣経験を有する。90 年代末にはタクシンと共にタイ愛国党の結党に加わり、タクシン政権下ではいくつかの大臣職を歴任した。2019 年の総選挙ではタイ貢献党の首相候補として選挙にのぞんでいた。

2019 年 8 月 25 日の会に注目してみたい[29]。

開催に先立って、党が運営するホームページ、Facebook 上に会の開催案内が掲載された（前出写真 3）。そこでは、参加を希望する者が上記の案内からリンクが張られているページでオンライン上から参加登録ができるようになっていた。開催が近づくにつれて、参加登録者数が伸びていく数字も掲載され、参加希望者の期待を膨らませる工夫が凝らされていた。

写真 7：「議会の星と握手する」会の会場
出所：筆者撮影

第 1 回目の会に登壇した下院議員は、チョンラナン・シーケーウ、スティン・クラングセーン、ジラユッ・フアングサップ、ジラーポン・シントゥプライの 4 名である[30]。チョンラナンは医師の資格をもつ北部ナーン県選出の下院議員で、インラック政権での副大臣経験も有する。スティンも地方東北部のマハーサラカム県選出で、博士号を持ち教育分野を中心として活躍、タクシン派政党の幹部などを長年務めてきた。ジラユッはバンコク選出で、かつてテレビ局のアナウンサーだったが、タイ貢献党から出馬、党の広報担当などの経歴を有する。ジラーポンは今回が初当選の女性だが、東北部ローイエット県の父の地盤を継いでいる。バンコク選出のジラユッを除いて 3 名が地方の北部や東北部選出の議員である。女性のジラーポンのみが初当選だが父の地盤を継いでおり、4 名ともがマスメディアなどでも比較的露出度が高い。会の名称は直訳すれば「議会の星」と会って握手する会となるが、その名称に適った登壇者と言えるだろう。

会の概略は以下の通りである。会場はバンコク中心部のペッブリタットマイ通りにあるタイ貢献党本部ビル 1 階ホールで開催された。開催時間は 13 時から 16 時と案内されていたが、開始は 15 分ほど遅れた。ホールには 200 席ほどが正面の登壇者と向き合って座る形で椅子が並べられていた（写真 7）。会場のうしろには三脚にたてられたカメラやビデオカメラも 10 台程が並べられ、移動しながら撮影するカメラマンも数名いた。選挙後でもあり、撮影された動画映像はネット上でも同時中継配信されたという。

開会前から会場には党の歌が流されており、全国から参加した人々は顔見知りが多いようで、互いに挨拶を交わして話し込む人や、スマートフォンで写真を撮り合う人が多く見られ、通常の声では話しが聞き取りにくいほどの賑わいだった。参加者約 230 名は会場の席を全て埋めて立ち見も出ており、大半が 40 代以上で 50 代から 60 代が多く、男女比は女性が 6 割程度に見受けられた。

司会進行は、党の広報官アヌソン・イアムサアートがつとめ、4 名の登壇者下院議員が会場後方から参加者の間をめぐって入場する場面から始められた。入場する 4 名の下院議員の先頭には、党の首相候補だったスダラットと党幹事長のアヌディット・ナーコンタップが並び立ち先導していた。両者ともメディアでの露出度が高く著名な政治家である。入場する議員等は正面の壇上に行き着く前に、会場の参加者から取り囲まれていた。バラの花を渡されてタイ式の挨拶であるワイの合掌を交わし合うだけでなく、参加者とのスマートフォンによる写真撮影を求められ、全員が壇上に行き着くまでに 20 分近くも時間を要していた（写真 8）。それでも写真撮影をむげに断らないのは、国民との直接の接点を重視するだけでなく、こうした議員との写真が各個人のソーシャルネットワークから拡散されていく広報戦略の意味もあるからであろう[31]。政治的なつながりという観点から考えれば、議員と国民とのつながりが

29　2019 年 8 月 25 日の筆者調査による。
30　タイ貢献党のホームページと Facebook を参照。
31　この点に関連して、あるタイ貢献党関係者は、候補者との写真が個人から発信され、自動的に広められていくことは

写真 8：「議会の星と握手する」会で参加者との写真撮影
出所：筆者撮影

写真 9：「議会の星と握手する」会の冒頭挨拶
出所：筆者撮影

写真というメディアで分かりやすく可視化されながら、瞬時に広められていくのである。議員と会って握手をするという会に関する具体的な情報は、党側から発信される広報だけではその伝達力に限りがあるだろう。しかし、参加した個人から発信される候補者との会での写真は、一目のうちに誰もが認識しやすいつながりの記号となり、発信者個々人のネットワークを介して開かれた空間へと一気にかつ国境をも超えて拡散されていく。

議員等が壇上に登った後、まず首相候補だったスダラット、そして現幹事長のアヌディットの挨拶がなされた（写真 9）。そこでは総選挙後に新しく再出発した党の新体制や、「新たに考え、新たに行動する（*khit mai tham mai*）」という党の新しいキャッチフレーズが紹介された。このキャッチフレーズは、分かりやすく韻を踏んだもので、会場全体で復唱しながら紹介されるなど、記憶にも残るように参加者を巻き込む形で会が進められていった。2 人の挨拶で約 30 分、開始が遅れた分も含めると、ここまでで 1 時間を超えていた。

その後は、司会の質問に 4 人の議員が答えるという形で、お互いの掛け合いを含めながら、議員の人となりやこれまでの経験談を紹介するような会のメインとなるやりとりが 1 時間以上続けられた。途中では、場が盛り上がって登壇した議員が歌を歌い出し、会場の参加者が立ち上がって踊り出す場面も見られた。さらに会場フロアからの質問が約 30 分程度受け付けられた後、党のキャッチフレーズなどに関するクイズ形式の質問が会場に投げかけられ、正解者には党のロゴが入ったポロシャツが配られた。最後には、会の名称にもなっている議員等との握手とワイの挨拶、写真を撮るという時間が別枠で設けられ、全体で 3 時間ほどの会が閉じられた。

3-2 「議会の星と握手する」会における相互行為

以下では、この会で特徴的だった相互行為のやりとりに関して、（1）から（3）の 3 つの場面を取りあげて検討してみたい。

（1）冗談と賞賛の掛け合い

全体を通して特徴的だったのは、開始から 3 時間もの時間を使いながら、司会や他の登壇者との間、

重要な意味があると語った。さらに候補者との写真がスマートフォンの待ち受け画面にされることも少ないないという（2019 年 3 月 10 日のチェンマイ県での聞き取りによる）。

あるいは登壇者と会場との間で互いに掛け合いを続け、冗談や軍政府側への皮肉を随所に差し挟むことなどで、会場は常に拍手と笑いに包まれており、参加者を全く飽きさせなかったことである。

まず、最初の登壇者紹介の際に、スダラットや司会が登壇者のジラユッと掛け合いをしながら紹介した場面に注目したい。

スダラット：「ジラユッ議員は今回の当選で何期目ですか。」
ジラユッ：「2 期目です。」
スダラット：「ジラユッ議員が 2 期も当選できたのは、誰のおかげ？」
会場は一気に笑いと拍手に包まれる。

ここで、最後のスダラットの発話は、ジラユッの答えに間髪を入れず、おどけた声色で発せされている。会場もスダラットがジラユッに対して冗談を投げかけたことを瞬時に理解したたからこそ、笑いと拍手に包まれることとなり、ジラユッ自身も苦笑いで応じている。ここでは、ジラユッの政治家としての経歴を簡単に紹介しながら、冗談と笑いを通して会場の参加者を巻き込んでいく過程が見て取れるだろう。加えて、年長者である首相候補となったスダラットと 2 期目のジラユッが、冗談を言い合えるような関係性にあることも、このやりとりを通して会場の参加者に理解されていく。

その後、他の議員登壇者の紹介を経た後で、大分時間をおいた後に、ジラユッは上記の冗談とやりとりを踏まえて、その延長線上に以下のような逸話を紹介した。ジラユッはかねて国営放送 NBT アナウンサー時代からタクシン派寄りだったが、政治情勢の中で NBT を辞めて失業した時に、早朝に見知らぬ番号からの電話がかかってきた時の逸話である。

ジラユッ：「朝寝ていたら見知らぬ番号から電話がかかってきたんです。電話を受けたら突然、『おはようございます。私は応援していますからね』と言うのですが、誰なのか分かりません。『どなたですか』と聞いたところ、『ノーイです』と言うのですが、これも分かりません。そこで、やむを得ず『どちらのノーイさんですか』と聞いたところ、なんと『スダラットです』と言うんです。」
会場からは笑いと拍手がもれる。
ジラユッ：「突然で驚いて、とにかく『ええっ。ありがとうございます』と答えたことだけは覚えています。私が職を失ったことを知って、直接に励ましの電話をくれたんです。」
会場は拍手に包まれる。

スダラットは女性政治家として当初からタクシン派政権の大臣などを歴任し、著名な人気政治家だった。ここで出てくるノーイは、タイ人が親しい間柄で通常呼びかわすスダラットの通称であろう。それほど面識のなかった著名な政治家が個人的な通称を名乗りながら突然に直接電話をかけてきたのである。ノーイが誰のことか分からない、あるいは、ノーイがスダラットの通称だと知っていても、まさかスダラットが電話をかけてくるとは思ってもいなかったジラユッは、「どちらのノーイさんですか」と聞き返さざるを得ない。そこで、最後の種明かしのようにスダラットの名前が出されるのである。この間のやりとりを会場で再現したジラユッの発話が、女性の口調を演じてみせた滑稽さもあいまって、会場からは笑いがあちこちでもれることとなった。

最後には、ジラユッを気にかけてスダラットが直接の電話で励ましてくれたことを一言で分かりやすくまとめている。会場は、そうしたスダラットの人間としての思いやりを、ここで紹介された笑いを含んだ逸話を介して共有したからこそ、拍手がわき上がることになったと言えるだろう。こうして、現議員ジラユッによる首相候補だったスダラットの人間的魅力に関する逸話を、集まりの場で参加者が直接共有し、かつ笑いと拍手で共感することを通して、集まった支持者国民との間の政治的つながりが生みだされていく契機となっていくのである。

さらに、開会直後のスダラットによる「2 期も当選できたのは、誰のおかげ？」という冗談をまじえ

写真 10：「議会の星と握手する」会の登壇者
出所：筆者撮影

たジラユッの紹介は、単純な冗談ではなく、その背後にこのような逸話もあったことが、ここに至って改めて会場でも思い起こされ納得されていく。会の冒頭でスダラットからジラユッに投げられた冗談が、会の中盤で、会場を巻き込んだ笑いと拍手によるスダラットへの賞賛という形でジラユッから返されて行くのである。この集まりの場では、こうしたやりとりが会場の参加者との間で共有され、共感されていくつながりの回路がその一端であれ生みだされていったと考えられるだろう。

(2) 拍手、笑いと揶揄、批判

次に、同じように会場が一体となって笑いと拍手に包まれたもう一つの場面を紹介したい。司会から登壇者に対して掛け合いを含めながら、質問が発せられていく場面である（写真 10）。

司会：「どのような下院議員でありたいと思いますか。」
スティン：「国民にとって価値ある下院議員でありたいと思っています。国民の思いを議会で伝えたいと思います。（中略）私たちタイ貢献党には、何の制限もありませんし、私たちを恐れさせるものは何もありません。何故なら私たちはこれまで既に恐ろしい時を経験してきたのですから。」
会場：「そうだ。」
かけ声と拍手がわき上がる。（中略）
司会：「ジラーポンさんは今回が初当選ですが、プラユット首相と接してみて、どのように感じていますか。」
ジラーポン：「下院議員として初めての経験ですが、（中略）プラユット首相を直に見たとき、権力を持っていることを見せようとしていて、何かかわいそうだと思いました。」
会場のあちらこちらから笑い声が聞こえる。
司会：「かわいそうとは、どういう意味ですか。」
チョンラナン：「憐れともいえますね。」
司会：「どちらも結局かわいそうとう意味ですが。」
会場からは笑い声がさらに増える。（中略）
ジラユッ：「NBT 時代から記者として彼に接してきましたが、彼の受け答えは常に『何故だ』、『何だ』と叱るだけなんです。」
会場は笑いと拍手に包まれる。（中略）

チョンラナン:「議会は国民が権力を行使する場だということに彼は関心を払っていないのです。(中略）ずっと軍にいて議会のことは分かっていないんです。私も彼の仕事ぶりを見てきて、しゃべり方は早い、行動も早いということは分かります。ただ、中身が間違っているんです。（中略）自分が力強く、権力を持っていているようにふるまう、そのパワーを見せたがるんです。そうじゃないですか。」

会場からは拍手と笑い。

ここでは、司会や登壇者間の掛け合いで、会場からは何度か笑いや拍手がわき起こっている。最初の拍手は、「私たちタイ貢献党は既に恐ろしい経験をしてきたのだから、私たちを恐れさせるものは何もない」旨の発言をしたスティンに向けられた。会場からは「そうだ」との合いの手も発せられた。恐ろしい経験とは、タクシン派の抗議集会に向けられてきた 2009 年 4 月や 2010 年 5 月などにおける軍の治安部隊からの武力攻撃や強制排除、さらには 2014 年クーデター以降の軍主導政府による言論抑圧などを指していると思われる。そうした攻撃や抑圧に晒される経験を重ねてきたタクシン派タイ貢献党の中心議員スティンの言葉に即座に反応し、同じ経験をしてきた参加者から同意の言葉が発せられたのである。

さらにスティンは、そうした経験があるからこそ、何も恐れず、国民の思いを伝える価値ある議員でありたい旨を表明している。参加者全員が実感するかつての恐ろしい経験があることで、その中に自身も立っていたスティンが発する言葉は説得力を持ち、それでも恐れずに今後も国民の声を届けるとする決意表明も、会場からの同調と共感を生みだして行くのである。こうしてここでは、共に恐ろしい経験をかいくぐってきた者同士、かつてを共に想起しながら、新たな共感とつながりがこの場の会場を巻き込んで生みだされていったと考えることができるだろう。

ここで紹介した場面で、他に拍手や笑いが向けられたのは、主に軍主導政府の首相プラユットに対する揶揄であった。まず、登壇者の中で最年少の若い女性議員ジラーポンが発したプラユット評「何かかわいそう」という言葉に対して会場から笑いがもれた。これは、年長の軍出身首相プラユットに対して、初当選の若い女性から年齢と立場の差を度外視した率直な感想が漏らされたことに、会場から思わず出た笑いであったと思われる。しかしながら、そのプラユット評をきっかけとして、その後のやりとりの方向はしだいにプラユットへの皮肉と揶揄へと向かっていく。

「かわいそう」という感想が、あまりに率直で意外なものであったことから、司会者はあえて「かわいそう」の意味を問いかけている。その問いを脇から受け取ったのは、司会とジラーポンの間に座っていた先輩議員のチョンラナンだった。「かわいそう」という口語的な形容詞を「憐れ」という多少文語的な言葉で置き換えてみせている。プラユットへの皮肉や揶揄の形容詞を、別な言葉でも置き換えることによって、批判がより強調されて会場に提示されていく。さらに司会によって、結局はどちらも同じ意味であることを指摘されると、会場では笑いが増強されていった。ここでの笑いは、チョンラナンと司会の掛け合いの妙からもたらされただけでなく、「かわいそう」「憐れ」と評されたプラユットに対する冷笑も含まれていたと言えるだろう。こうして、皮肉や揶揄を契機とした冷笑を含んだ笑いを会場の参加者間で共に共有することによって、揶揄される対象のプラユットに対して、笑いを共有する私たちという両者を線引きする構図が生みだされることにもつながっていったのではないだろうか。

会場の私たちとは切り離されたプラユットに対する皮肉や揶揄は、この後のやりとりでさらに具体的に指摘されていく。まずジラユッが、記者としてプラユットと接した自らの経験をもとに、プラユットの記者等に対する言動を直接話法によって紹介している。「何故だ」「何だ」というプラユットの言葉を強くぞんざいな叱り言葉として直接話法で演じて見せているのである。日頃、マスメディアのニュースでもこうした場面が度々放映されることを見知っているこの場の参加者は、その演じて見せた口調が似ていたこともあって、プラユットへの非難を含めた笑いと演じてくれたジラユッへの拍手で応えているのである。

ジラユッと会場とのやりとりを受けて、次にチョンラナンがプラユットへの揶揄や皮肉、非難をより

具体的な言葉で詳しく説明していく。プラユットが軍人で議会というものを理解していないこと、しゃべり方や行動は早いがその中身が間違えていること、自らが権力を持っていることを誇示しているだけであることが指摘される。それまでは揶揄や皮肉だったやりとりを、ここではさらに踏み込んで政治家としての資質に関わる具体的な批判として提示しているのである。ジラーポンの率直な感想から、ジラユッによる口調をまねた揶揄、皮肉、非難のやりとりを経て、最後にチョンラナンによって具体的な批判の言葉として会場に提示されていく一連の相互行為として捉えることができるだろう。

しかも、最後のチョンラナンの発話では、プラユットが本来は軍人であり、議会というものが国民の権力を行使する場であることに関心を払っていないという批判も示されている。これは、単にプラユットへの単純な批判にとどまらない。国民の権力に対して、プラユットが誇示する軍人としての権力が対比的に提示されてもおり、プラユットは国民の権力の場であるべき議会を理解していないと批判するのである。ここでは同じ権力という言葉を使いながら、それを国民のものとして重視するのか、軍や自らのものとして重視するのかという対比的な構図が喚起されている。この発話の背後には、私たちタイ貢献党は、プラユットや軍主導政府とは違い、国民の権力とその行使の舞台となる議会を重視しているのだとする自他を分ける線引きも含意されていると考えられるだろう。

さらに、チョンラナンによる最後の発話は、ここで取りあげた最初のスティンによる発話と呼応してくることにも注目したい。スティンは国民にとって価値のある、国民の思いを伝える下院議員でありたいと表明していた。こうして、プラユットに対しては軍と自らの権力に固執すると批判する一方で、私たちタイ貢献党側は国民の側に立つのだということが、会場との掛け合いによる一連の相互行為の中で提示されていったのである。ここでは、参加した人々も笑いと拍手で応じ、提示された内容に同調・同意していく過程が見て取れると言えるだろう。

(3) 会場の参加者からの質問と応答――新たな文脈での流用の実践

司会と登壇者とを主とするやりとりの後、会の終盤に入って、会場フロアにいる参加者からの質問を受け付ける時間が設けられた。その質問の二つ目として、中学校の教師として教育に携わってきたという 40 代の女性が手を挙げて発言した。

40 代女性参加者：「軍政府は盛んに『良き人』としての教育が重要だと言いますが、『良き人』はアマートにとっての『良き人』なのです。（中略）本来、私たち国民にとっての『良き人』となるために必要な教育は、社会、特に歴史や道徳、マナーのしつけ、そして民主主義だと思います。同意してくれますか？」
会場：「おー。」拍手と歓声。（中略）
40 代女性参加者：「つまり『良き人』というより、タイのシティズンシップを教えることが重要です。（中略）この点を議員の皆さんにはお願いしたいと思います。」
会場からは拍手。（中略）
スティン：「私は、教育特に田舎の教育に携わってきました。都会ではなく田舎の人々にも教育の機会を与えようとしてきました。（中略）そこでは、いわゆる成績や IQ が良い子供を育ててきたのではありません。私は、しっかりした考えを持った子供に育てるには、IQ ではなく EQ の方が重要だと信じています。IQ は成績が良い子でしょうが、EQ はいわゆる賢くしっかりした考えを持てる子です。（中略）タイには、この EQ の教育、つまりエモーションの側面が重要だと思います。」（中略）
司会：「すみません。EQ を教育する学校に関しては、是非プラユット首相にお願いしたいのですが。」
会場：「おー。」笑いと拍手、歓声。（中略）
スティン：「プラユットは、EQ が欠けている人だと思います。IQ もそれ程高いとは思えませんが。」
会場からは笑い。
スティン：「彼に最も欠けていると思うのは、EQ だけでなく MQ でしょう。MQ は忍耐や道徳の

側面です。国の指導者にまず必要なのは本来 MQ のはずです。次に必要なのは EQ です。（中略）『良き人』を育てる最たる近道は、本来大人が『良き人』となってその範を示すことです。」
会場からは拍手と歓声。（中略）
スティン：「政府は『良き人』と盛んに言っていますが、『良き人』でない人が教える教育を私は信じません。（中略）国の指導者がまずは、『良き人』の範を示すべきなのです。そうではないですか。（中略）ありがとうございます。」
会場からは拍手がわき上がる。

まず、質問に立った女性の参加者は教師であることもあって、軍主導政府が推進してきた「良き人（*khon di*）」を育てる教育政策に具体的に言及し批判しながら、自らの意見を含めて整然と述べている。ここで取りあげられている「良き人」とは、反タクシン派 PAD の運動などにおいて 2008 年ころから盛んに強調され、その後反タクシン派を継いだ PDRC や、軍主導政府にも連綿として引き継がれてきたキーワードである。

反タクシン派や軍主導政府の認識においては、特に農村部では選挙で買収されるような国民や政治家が多いため、その衆愚政治がタクシンのような首相を生み、タイを悪くしてきたと主張する[32]。その上で、選挙のみではなく任命された国民代表の「良き人」による政治が必要だとするのである。さらに、クーデター後の軍主導政府では、軍部側が理想とする良き国民を創り上げようとする「12 の価値」が強調され、全国の学校教育で繰り返し教え込まれていった[33]。結果、2019 年の選挙を受けた首相選出時にも、そうした考えが反映され、選挙によらない「良き人」とされる上院 250 名の票がプラユットの首相選出を決定づけることとなったのである。

ここで質問に立った女性参加者は、こうした背景を踏まえて、教育現場で盛んに強調される「良き人」とは国民に取っての「良き人」ではなく、あくまで反タクシン派の軍主導政府側から見ての「良き人」に過ぎないことを指摘している。ここで使われた「アマート」という言葉は、かつてのタクシン派の運動や集会において使われた敵対する反タクシン派の指導者らを指す痛烈な批判を含んだレッテルである[34]。「アマート」とは、歴史的にタイ社会の支配階層を担ってきた中央の官僚や軍を中心とする高官を意味し、ごく少数の「アマート」が国民をないがしろにしてタイを牛耳ってきたことが、タイを悪くしてきたのだとタクシン派は批判してきたのである。

今回の会場に参加している人々は、こうした背景を十分に知っており、背景を踏まえた上で質問している女性の意見に耳を傾けていく。女性は、反タクシン派や軍主導政府が盛んに強調してきた「良き人」ではなく、国民にとっての本来の「良き人」を教育するには歴史や道徳、マナーのしつけ、そして民主主義の教育が重要だと自らの意見を述べている。特に最後に挙げられた民主主義という言葉が強調され、この点に会場の同意を求めている。この発話は、上述した背景を踏まえれば、軍主導政府やプラユットへの批判ともなってくと考えられるだろう。つまり、軍主導政府等が重視してきた「良き人」は、国民の投票による選挙で選出されるのではなく、軍主導政府が一方的に「良き人」と見なして任命される人であることを、この女性の発言が批判することとなっている。その上で、任命される「良き人」ではなく、国民の選挙で選ばれる「民主主義」が重要だと指摘しているのである。こうした背景を踏まえた批判を、会場の参加者が理解し、同意したからこそ、女性に対してすぐに同意の声と拍手で応じている。会場からの同意の声を受けて、女性は最後に、軍主導政府側が言う「良き人」ではなく、それをタイのシティズンシップという言葉で置き換えて表現し、そうした教育を登壇者である議員にはお願いしたいと締めくくっている。

32　高城（2019、172-173）を参照。特に 2008 年に反タクシン派の PAD が示した「新しい政治」に関しては、重富（2010）、Nelson（2010）なども参照。農村部の住民に対する愚民観に関しては、PAD 側のリーダーに対するインタビューにも見て取れる（柴田 2010、104-105）。
33　高城（2019、183）も参照。
34　村嶋（2009）、Nostitz（2014）なども参照。

この女性からの問いかけとお願いを受けて応答したのは、自らも教育問題に長年取り組んできた登壇者議員のスティンだった。スティンはまず、自らが都会ではなく、東北タイの田舎での教育に携わってきたことを強調した。ここで田舎を強調したことにも、背景があると考えられる。つまり、反タクシン派や軍主導政府が「良き人」として念頭に置いているのが、都市部に居住する高学歴の人々であることに異を唱えようとしているのである。軍主導政府等の認識では、田舎の住民に関して選挙で買収されるような愚民としてしか見ていない、その視点に対して異を唱え、スティンは田舎での教育に自ら携わってきた経験と視点から以下に続く発話を展開していくのである。

ここで展開されるスティンの発話では、一部教育学的な専門用語も差し挟まれながら自らの教育観が説明されていく。つまり、スティンが生涯をかけて取り組んできた田舎での教育は、良い学校に行くための教科の成績が良い、いわゆる IQ（知能指数）が高い子供を育成することが目的ではないというのである。そうではなくて、しっかりした考えを持った子供を育成するために、IQ よりも EQ（心の知能指数、感情指数）の方がずっと重要だと指摘する。スティンは博士号を持ってもおり、専門用語を挟みながら、かつその専門用語 EQ をエモーションの側面としてかみ砕いて説明しながら、会場の参加者に訴えかけていく。

ここで専門用語が出てきたためか、司会が即座に関連する合いの手の質問を投げかけている。EQ 教育に関しては、是非ともプラユット首相にお願いしたいというのである。この司会の質問は、プラユットに対する皮肉と揶揄を含んだものである。そのことを、会場が瞬時に理解したからこそ、参加者は笑いと拍手、歓声で応じている。この質問は、専門用語で難しくなりがちな説明を、プラユットへの揶揄を込めた分かりやすい合いの手で会場の笑いを誘うことによって、より身近な説得的な説明として提示する役割を持っていると言えるだろう。

司会による質問も受けて、次にスティンは、プラユットに欠けているのは EQ だとして、皮肉や揶揄を明確な批判として展開する。加えて、IQ もそれほど高いとは思えないと冗談めかして言及することで、会場からは笑い声が生じている。この笑いも冗談への反応のみならず、能力に欠けると批判されたプラユットへの冷笑を含んだ笑いでもあるだろう。

続けてスティンは、プラユットの能力に関する専門用語を用いた批判を、さらに強めていく。ここで新たに出される専門用語は MQ という言葉であり、プラユットに最も欠けているのは MQ だとしている。MQ とは道徳的指数を指すが、一般には必ずしも理解されていない用語であろう。そこで、スティンは忍耐や道徳の側面だと簡潔に説明を加えている。一般にはなじみ薄い専門用語であっても、それがプラユットという批判の対象と結びつけられ、忍耐や道徳という用語の意味が提示されると、会場の人々にとっては即座に理解可能な納得につながっている。プラユットに欠けているものと言われれば、先の(2)の事例でも言及されているように、すぐに記者を叱りつけるようなぞんざいな言葉遣いが多くの人に思い起こされるのである。そうした叱り言葉を連発するプラユットには、MQ、つまり忍耐や道徳が最も欠けているのだとの説明は、会場の参加者にとってはまさに腑に落ちる説明となっていく。

その上で、スティンは最初に質問で言及された「良き人」と教育との関連に立ち戻り、自らの経験を踏まえた見解をまとめていくのである。「良き人」を育てる近道は、大人が「良き人」となってその範を示すことだとするスティンの発話は、女性による質問から続く一連のやりとりを踏まえ、聞いている会場の参加者に説得的に示されていく。「『良き人』でない人が教える教育を私は信じない。国の指導者がまずは、『良き人』の範を示すべきなのです」とするスティンの最後の発話は、だからこそ会場からの同意の拍手で迎えられていくのである。

ここで、スティンの最終部の発話において注目したいことは、これまで反タクシン派や軍主導政府によってその意味づけが独占されていた「良き人」の内容が、ここでの一連の相互行為を経て、別の新しい文脈の中に置き換えられていったと考えられることである。それまで軍主導政府などでは、特に都市部の良い学校を出た高学歴の人々が「良き人」として国を導いていくべきであり、田舎の買収にまみれた人々と対置されて捉えられていたと言えるだろう。しかしながら、ここでの一連の相互行為はそうした文脈で独占されてきた意味づけを、新しい独自の文脈の中に位置づけ直していったと考えられるので

ある。スティンの発話では、軍主導政府の代表であり、彼らが主張する「良き人」として国を導いていくべき指導者のプラユットからして、果たしてそれにふさわしいのかと疑問と批判を突きつけている。軍主導政府などが繰り返し重視してきた「良き人」は、そうした自らが国を導いていくべきだとする彼らにとって都合の良いレトリックに過ぎないことを暴き出しているとも考えられるだろう。

こうして軍主導政府によって独占されてきた「良き人」という意味づけが、別の新しい文脈の中で捉え直される可能性として切り拓かれていく。新しい文脈での意味づけには、「良き人」が都市部の高学歴者や IQ のみでは計れない、むしろ田舎で生まれ育ち学歴はなくても EQ や MQ を培った人々なども含まれてくることになるだろう。ここでの一連の相互行為は、軍主導政府に独占されていた「良き人」の意味づけが、別の新しい独自の文脈に置き換えられ、その意味づけを自らの文脈に奪い取ろうとする事例と考えられるのではないだろうか。いわば、流用という実践の事例と言うこともできるだろう[35]。「良き人」の意味づけは、軍主導政府ではないこの会の参加者によって我がものとされ、新しい文脈の中に流用されて置き換えられていったのである。結果、新たな文脈に置き換えられた「良き人」が範となって国を導いていくべきだとするスティンの最後の発話は、会場から拍手で同意、歓迎され、共有されていくのである。

おわりに

本稿では、2019 年総選挙前後のタイにおける政治的つながりの回路がどのように変遷してきたのかを主に論じてきた。総選挙前後の概況と軍主導政府側の動きを整理し、特に反軍派の動向に注目したのである。反軍派の中でも、長年軍主導政府による言論統制でその活動が封じられていたタイ貢献党と、新たに結成されたばかりの新未来党の動向が重要であると考えられたが、本稿では、紙幅の関係から特にタイ貢献党の対応に焦点を当てることとした。つまり、反軍派の政党がいかにして国民とのつながりを獲得して来たのか、また選挙後も含めていかにつながりの回路を獲得しようとしているのか、本稿ではその一端をタイ貢献党の動きに焦点を当て、2019 年総選挙前後の変遷を中心に検討したのである。

特に、タイ貢献党が選挙を経て、新たに国民とのつながりを築く機会として開催した政治的集まり「議会の星と握手する」会に着目した。その政治的な集まりにおいて、いかなる相互行為のやりとりが行われ、政党側はいかに国民とのつながりを再構築しようとしているのか、さらに、参加した国民はそこでどのような受け止めをしているのか、具体的相互行為の一端から垣間見ようとしたのである。マクロな政治情勢、政治過程といった視点のみではなく、政治的集まりという具体的な現場のミクロなコミュニケーションの過程からも、国民と政党との最先端の接合点におけるつながりの回路の一端に光を当てた試みと言えるだろう。

最後に、本稿で注目された論点をいくつか整理してみたい。

まず第 1 に、2014 年クーデターから選挙戦が開始される前までの約 4 年半は、政治的つながりという側面から考えれば、言論統制や政治の司法化という圧迫により、結果として対象となる反軍派の人物や政党の政治的生命までもが絶たれるという点において、国民とのつながりの回路が一方的かつ強制的に遮断されるということになっていた。第 2 に、そうした回路が遮断された時期においても、限られた宗教的な儀礼などを利用して国民とのつながり、あるいはメンバー間のつながりを何とか維持しようとした事例があったことにも注目した。

第 3 は、つながりの回路におけるインターネットやソーシャルネットワークから地方末端のコミュニティラジオまで多様なメディアが果たす役割についてである。クーデター前は現代的で多様なメディアを駆使して国民とのつながりの回路が築かれる状況となっていたが、クーデター後はそれが一方的に遮断され、監視・検閲の対象となった。2019 年の選挙前後からそれらが一部認められ、選挙後も監視の

35 流用（appropriation）とは、ある社会的文脈にある物事や記号を、別の文脈に転用し、異なった意味を付与する実践を指す。領有とも訳され、支配的エリートのやり方に服従しているように見える民衆が、支配的文化が押しつける意味をずらすという日常的実践としても注目される。

対象でありながらも、ウェブサイトやスマートフォンを介したソーシャルネットワークの役割が一層大きくなっていることは注目すべきであろう。特に、タイ貢献党による選挙後の政治的集まりで見られたように、参加した個人が撮影した議員とのスマートフォンによる写真が、各個人のソーシャルネットワークを介して拡散されていた。写真が一目のうちに議員と国民とのつながりの記号となり、発信者個々人のネットワークを介して開かれた空間へと一気にかつ国境をも超えて拡散されていくことは、今後ますます増加していく可能性が高いだろう。

第4は、政治的集まりにおける相互行為に関する注目点である。全体を通して、司会や他の登壇者、会場との間で互いに掛け合いを続け、冗談や軍政府側への皮肉や揶揄、批判を随所に差し挟むことなどで、会場は常に拍手と笑いに包まれ、参加者を全く飽きさせない会となっていた。特に相互行為の（1）で、笑いや揶揄、批判を会場で参加者が直接共有し、かつ共感することを通して、集まった支持者国民との間の政治的つながりが生みだされていく契機となっていたことは重要なポイントであろう。加えて、相互行為の（2）で見たように、共に恐ろしい経験をかいくぐってきた者同士、かつてを共に想起しながら、新たな共感とつながりがこの場の会場を巻き込んで生みだされていった事例も見受けられた。

第5に、相互行為の中で自他の線引きが生みだされ、私たちのつながりが確認されていく場面にも注目したい。相互行為の（2）においては、「かわいそう」「憐れ」と揶揄される対象のプラユットに対して、この場で笑いを共有する私たちは国民の側に立つのだという両者を線引きする構図が生みだされることにもつながっていったと考えられた。

第6は、相互行為の（3）で見られた「良き人」の意味づけをめぐる攻防である。これまでは軍主導政府によって独占されてきた「良き人」という意味づけが、別の新しい文脈の中で捉えられる可能性として切り拓かれていた。いわば、流用の実践ともいえる相互行為の事例である。それは、この場に集まった参加者の間で新しい文脈での意味づけが共有されることで、新しいつながりの回路が生みだされていく契機と考えることができるだろう。

こうして、特に政治的集まりにおける相互行為というミクロなやりとりにも着目することで、マクロな政治情勢や政治過程の視点のみでは見落とされてしまいかねない、回路が構築されていく微細な契機も議論の射程圏内に含みこむことができるのではないだろうか。他方で残された課題もある。まず、今回注目した政治的な集まりは、政党側が主催してしつらえた場という意味で、通常の日常的な場所とは異なるという側面にも注意を払う必要があるだろう[36]。加えて、本稿では、反軍勢力の中でもタイ貢献党の動きに焦点を絞っているが、もう一つの重要な反軍勢力である新未来党も、選挙後の同じ時期に政治的な集まりを開催し始めている。そうした新未来党による政治的集まりの場所、さらには、より日常的な政治的集まりの場所での相互行為に関しては、今後に残された課題としたい。

（たかぎ　りょう　　所員　神奈川大学経営学部教授）

参考文献

青木まき・今泉慎也　（2019）「選挙をめぐる攻防、東部経済回廊の進展」『アジア動向年報 2019』アジア経済研究所　282-299 頁。

浅見靖仁　（2010）「プリンシパル＝エージェント理論から見たタクシン派の政治行動」『タイ国情報』44(4)　1-23 頁。

今泉慎也　（2019）「2017 年憲法の議会・選挙制度からの検討」『IDE スクエア――世界を見る眼』 アジア経済研究所　1-6 頁。（https://www.ide.go.jp/Japanese/IDEsquare/Eyes/2019/ISQ201920_004.html　2020 年 1 月 5 日閲覧）

36　国家の存在を前提とする方法論的国家主義を相対化しようとし、日常生活に政治を見出そうとする近年の研究には、田村編（2019）などがある。そこでは、特定の地域的な文脈を超えた広い議論も展開されているが、中には、社会運動における日常の政治に着目する論考や、日常生活と政治の問題にエスノメソドロジーの視角からアプローチする可能性を論じた論考などが含まれている。

江川暁夫 （2014）「タイの籾米担保融資制度の社会的コストと農民への便益」『地域学研究』44（3） 289-303 頁。
――（2019a）「福祉カード事業―― （1）貧困・低所得者対策としての有用性」『タイ国情報』53（1） 19-28 頁。
――（2019b）「福祉カード事業―― （2）事業をめぐる問題点」『タイ国情報』53（2） 16-25 頁。
重冨真一（2010）「タイの政治混乱――その歴史的位置」『アジ研ワールド・トレンド』178 アジア経済研究所 35-41 頁。
――（2018）「政治参加の拡大と民主主義の崩壊――タイにおける民主化運動の帰結」 川中豪編 『後退する民主主義、強化される権威主義――最良の政治制度とは何か』 ミネルヴァ書房 45-70 頁。
――（2020）「続くタイの政治混乱――あぶりだされた真の対立軸」『IDE スクエア――世界を見る眼』 アジア経済研究所 1-11 頁。（https://www.ide.go.jp/Japanese/IDEsquare/Analysis/2020/ISQ202010_001.html 2020 年 1 月 20 日閲覧）
柴田直治 （2010）『バンコク燃ゆ――タクシンと「タイ式」民主主義』 めこん。
シリヌット・クーチャルーンパイブーン （2016）「タイ学生の政治意識・行動――政治的有効性感覚・政治参加を中心に」『北海道大学大学院文学研究科 研究論集』16 187-207 頁。
高城玲 （2014）『秩序のミクロロジー――タイ農村における相互行為の民族誌』 神奈川大学出版会。
――（2015）「タイの政治・社会運動と地方農村部――1970 年代から 2014 年までの概観」『神奈川大学アジアレビュー』2 4-39 頁。
――（2018）「分断される国家と声でつながるコミュニティ――タイにおける政治的対立と地方コミュニティラジオ局」 永野善子編著 『帝国とナショナリズムの言説空間――国際比較と相互連携』 お茶の水書房 125-152 頁。
――（2019）「現代タイにおける政治的対立の歴史的背景――2014 年のクーデターにいたるまで」 山本博史編著 『アジアにおける民主主義と経済発展』 文眞堂 159-189 頁。
高橋徹 （2015）『タイ 混迷からの脱出――繰り返すクーデター・迫る中進国の罠』 日本経済新聞出版社。
玉田芳史（2013）「民主化と抵抗――新局面に入ったタイの政治」『国際問題』625 18-30 頁。
――（2017）「タイにおける司法化と君主制」 玉田芳史編著 『政治の司法化と民主化』 晃洋書房 19-38 頁。
――（2019）「8 年ぶりの総選挙――親軍派と反軍派の駆け引き」『タイ国情報』53（1） 1-18 頁。
田村哲樹 編 （2019）『日常生活と政治――国家中心的政治像の再検討』 岩波書店。
外山文子 （2018）「タックシンはなぜ恐れられ続けるのか――滅びないポピュリズムと政治対立構造の変化」外山文子・日下渉・伊賀司・見市建編 『21 世紀東南アジアの強権政治――「ストロングマン」時代の到来』明石書店 37-99 頁。
真辺祐子 （2019）「タイ 軍政終焉の総選挙？」『NIDS コメンタリー』96 防衛研究所 1-5 頁。
村嶋英治 （2009）「タクシン支持赤シャツ UDD の大攻勢、パタヤー ASEAN サミットの流会――2009 年 3 月 -4 月のタイの大政争」『タイ国情報』43（3） 1-46 頁。
――（2010）「2010 年 3 月 -5 月赤シャツ派（UDD）のバンコク市街占拠闘争――準備された政変・革命の挫折」『タイ国情報』44（3） 1-44 頁。
山本博史 （2016）「タクシン政権とタイにおける民主主義」『商経論叢』51（4） 神奈川大学経済学会 85-106 頁。
Bowie, K.（2008）“Vote Buying and Village Outrage in an Election in Northern Thailand: Recent Legal Reforms in Historical Context”, *The Journal of Asian Studies* 67（2）, pp. 469-511.
Internet Law Reform Dialogue（iLaw）ed.（2019）*Konlakem Lu'aktang* 62（2019 年総選挙のしくみ）, Bangkok: Internet Law Reform Dialogue（iLaw）.
Krasuang Diciton Phu'a Sethakit lae Sangkhom（デジタル経済社会省）ed.（2019）*Raingan Phonkan Samruat Phlutikam Phu Chai Intoenet nai Prathet Thai Pi 2561*（2018 年のタイにおけるインターネット利用者に関する報告）, Bangkok: Krasuang Dicitan Phu'a Sethakit lae Sangkhom（デジタル経済社会省）.
Nelson, M.（2010）“Thailand's People's Alliance for Democracy: From 'New Politics' to 'Real' Political Party?”, in Askew, M. ed. *Legitimacy Crisis and Political Conflict in Thailand*, Chiang Mai: Silkworm Books, pp. 119-159.
Nostitz, N.（2014）“The Red Shirts from Anti-Coup Protesters to Social Mass Movement”, in Pavin Chachavalpongpun ed., “*Good Coup*” *gone Bad: Thailand's Political Development since Thaksin's Downfall*, Singapore: ISEAS Publishing, pp. 170-198.

Pavin Chachavalpongpun ed.（2014）*"Good Coup" gone Bad: Thailand's Political Development since Thaksin's Downfall*, Singapore: ISEAS Publishing.
Walker, A.（2008）"The Rural Constitution and the Everyday Politics of Elections in Northern Thailand", *The Journal of Contemporary Asia* 38（1）, pp. 84-105.

新聞、URL

Bangkok Post
New Gen Network Bangkok　Facebook　（https://www.facebook.com/ngnbkk/　2020 年 1 月 5 日閲覧）。
Phak Anakhot Mai（新未来党）（https://futureforwardparty.org　2020 年 1 月 5 日閲覧）。
Phak Anakhot Mai（新未来党）　Facebook　（https://www.facebook.com/FWPthailand/　2020 年 1 月 5 日閲覧）。
Phak Phu'a Thai（タイ貢献党）（https://www.ptp.or.th　2020 年 1 月 5 日閲覧）。
Phak Phu'a Thai（タイ貢献党）　Facebook　（https://www.facebook.com/pheuthaiparty/　2020 年 1 月 5 日閲覧）。
Samnakngan Khanakamakan kan Lu'aktang（タイ選挙管理委員会事務所）（https://www.ect.go.th/ect_th/　2020 年 1 月 5 日閲覧）。

附記：本研究は日本学術振興会（JSPS）科研費 17H01648 の助成を受けた。